高岡市埋蔵文化財調査概報第20冊

市内遺跡調査概報Ⅱ

— 平成４年度，下佐野遺跡，間尽遺跡の調査 —

1993年３月

高岡市教育委員会

序

本書は，個人住宅等の建設に伴い実施した，下佐野遺跡と間尽遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

この２つの遺跡は，いずれも長期にわたり営まれた大集落遺跡ですが，ことに弥生土器の良好な資料の出土地として広く知られてきた遺跡です。下佐野遺跡は高岡市街地の南西郊外に位置し，弥生時代後期の遺跡として著名です。間尽遺跡は高岡市の西方，西山丘陵の山麓に位置し，東北系の弥生土器である「天王山式土器」がまとまって出土した遺跡として著名です。

今回は，それぞれの集落遺跡の一部を発掘調査したにすぎませんが，このような個々の調査の積み重ねが，集落遺跡の解明に少しづつ寄与するものと思っております。

終わりに，調査に当たり，御協力頂きました大表敏雄氏，横田徳太郎氏，笠原外二氏，高木金治氏をはじめ，地元の皆様，関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成５年３月31日

高岡市教育委員会
教育長　篠　島　　満

例　　言

1．本書は，下佐野遺跡及び間尽遺跡における発掘調査の概要報告書である。
2．当調査は，平成４年度の国庫補助金の交付を受けて，高岡市教育委員会が実施した。
3．調査地区は，以下の２箇所である。
（１）下佐野遺跡，横田地区
高岡市佐野 921－２・３
（２）間尽遺跡，高木地区
高岡市国吉169
4．調査期間は，平成４年５月６日から同年６月５日までである。
5．当調査は，高岡市教育委員会社会教育課文化係主任山口辰一及び事務員榎木和代が担当し，社会教育課長野村一郎，文化係長大石茂が総括をした。
6．本書の執筆は，山口が担当した。

市内遺跡調査概報Ⅱ

目　　次

序

例言

目次

1．下佐野遺跡，横田地区……1

Ⅰ．序　説……3

Ⅱ．遺　構……6

Ⅲ．遺　物……8

Ⅳ．結　語……10

2．間尽遺跡，高木地区……11

Ⅰ．序　説……13

Ⅱ．遺　構……16

Ⅲ．遺　物……17

Ⅳ．結　語……18

図　面　目　次

図面1　遺物実測図　下佐野遺跡，横田地区　弥生土器

図面2　遺物実測図　下佐野遺跡，横田地区　弥生土器

図面3　遺物実測図　下佐野遺跡，横田地区　奈良時代～中世の土器類

図面4　遺物実測図　下佐野遺跡，横田地区　石製品，砥石

図　版　目　次

図版１　遺構　下佐野遺跡，横田地区　１．調査地区全景（南西）
　　２．調査地区全景（南東）
図版２　遺構　下佐野遺跡，横田地区　１．竪穴住居址ＳＩ04全景（西）
　　２．竪穴住居址ＳＩ04全景（東）
図版３　遺構　間尽遺跡，高木地区　１．調査地区全景（北東）
　　２．調査地区全景（南）
図版４　遺構　間尽遺跡，高木地区　１．溝ＳＤ01全景（北）
　　２．溝ＳＤ01全景（南）
図版５　遺物　下佐野遺跡，横田地区　弥生土器・土師器
図版６　遺物　下佐野遺跡，横田地区　石製品

挿　図　目　次

第１図　下佐野遺跡位置図（1/5万）…… 3
第２図　下佐野遺跡，横田地区位置図（1/5,000）…… 4
第３図　下佐野遺跡，横田地区遺構図（1/200）…… 7
第４図　間尽遺跡位置図（1/5万）……13
第５図　間尽遺跡付近遺跡地図（1/1万5千）…… 14
第６図　間尽遺跡，高木地区位置図（1/5,000）……15
第７図　間尽遺跡，高木地区遺構図（1/200）……16
第８図　間尽遺跡，高木地区出土土器実測図（1/3）……17

調査参加者名簿

発掘　稲場由美子，大嶋成子，大谷知可子，岡島敏雄，岡田幸子，楠友栄，小林茂，杉本広政
高田えみ子，橋真理子，前田武國，松井弘子，松村孟，水外一郎，三島幸代，宮下真知子

整理　稲場由美子，大谷知可子，岡田幸子，高田えみ子，道谷美奈子，橋真理子，三島幸代

１．下佐野遺跡，横田地区

目　　次

Ⅰ　序　　説……3

Ⅱ　遺　　構……6
1．竪穴住居址……6
2．土坑……6
3．溝……6

Ⅲ　遺　　物……8
1．弥生土器……8
2．奈良時代～中世の土器類……9
3．石製品……9

Ⅳ　結　　語……10

挿　図　目　次

第1図　下佐野遺跡位置図（1/5万）……3
第2図　下佐野遺跡，横田地区位置図（1/5,000）……4
第3図　下佐野遺跡，横田地区遺構図（1/200）……7

Ⅰ 序　説

遺跡概観

当「下佐野遺跡」は，高岡市街地の南西郊，ＪＲ高岡駅の南西側約2.5kmに位置する。遺跡の西側は泉ケ丘団地である。すなわち，泉ケ丘団地の西側一帯が当遺跡である。この付近は，庄川が形成した扇状地の前面にあたり，東側には千保川が，西側には和田川が北流している。千保川は17世紀末まで，庄川の本流であった。また，和田川は庄川扇状地の湧水を水源とする河川の一つである。この両河川に挟まれた微高地に当遺跡が立地している。

第１図　下佐野遺跡位置図（1/5万）

当遺跡は，昭和38年に発見され，その後昭和42年に当遺跡の紹介が行われ，多くの人に知られるに至った。この時点では，昭和39年に当地で実施された区画整理事業の工事に伴って出土した遺物を中心に，当遺跡が，弥生時代後期の遺物や，土師器・須恵器が出土する遺跡として認識されていた。

最近，開発行為に伴い，高岡市教育委員会が数回の発掘調査を実施した。いずれも農地転用による店舗付住宅等の建設によるもので，個々の面積は500㎡以下と狭い地区である。これらの調査により，当遺跡の具体的様相が除々に判明してきている。

調査に至る経緯

平成２年９月末，市農業委員会からの照会で，当該地における農地転用と店舗付住宅の建設計画を知った。譲渡人（地主）の大表敏雄氏の承諾を得て，10月18日～22日に試掘調査を実施した。この結果，土坑や溝等の遺構が検出され，土師器・須恵器等の遺物が出土した。本調査の必要性がある内容であった。この結果を持って，施主の横田徳太郎氏，設計・施工の株式会社創建築事務所（笠原外二氏）と協議し，本調査実施に至った。

第２図　下佐野遺跡，横田地区位置図（1/5,000）

調査の経過

発掘調査は，平成４年５月６日から６月３日まで実施した。実働調査日数は15日である。先ずバックフォーにより表土を除去した後，人力による掘り下げを行った。敷地，すなわち調査対象面積998m²（幅25.9ｍ，奥行38.5ｍ）に対して，387m²の発掘調査を実施した。発掘部分は建物建設予定地部分を中心としたものである。

検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址１軒（ＳＩ04）

土坑４基（ＳＫ36～39）

溝３条（ＳＤ16～18）

遺構の番号は，先に調査を実施し報告した，同じ下佐野遺跡の①明光電気地区，②明光電気駐車場地区，③中尾地区，④井波地区からの連番とした。

出土遺物

遺物は，主に，次の３時期のものである。１．弥生時代後期，２．奈良～平安時代，３．中世である。量的には弥生土器が多い。遺物の種類は以下のとおりである。

１．土器類；弥生土器・土師器・須恵器・珠洲・青磁

２．石製品；砥石

グリッド

調査地区のグリッドは，他の地区と同様，平面直角座標系に合わせた。第３図における，Ｘ＝１，Ｙ＝１の地点は，原点より，西へ15,266ｍ,北へ80,276ｍの位置である。このグリッドの番号については，この地区のみの表示とした。

Ⅱ 遺　構

1．竪穴住居址

ＳＩ04

調査地区の東端部（７～９，３～５）区で検出された竪穴住居址である。住居の西側の一部分を検出した。東側は調査地区外である。柱穴は主柱穴の一つと推定されるもので，径55～130cm，深さ28cmを計る。周溝は，幅30～90cm，深さ５～10cmである。

出土遺物は弥生土器である。

2．土　坑

ＳＫ36

調査地区の南端部（６，１）区で検出された。平面形は円形を呈し，規模は，径1.4m，深さ16cmを計る。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ37

調査地区の南部（６・７，２・４）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸4.5m，短軸2.8m，深さ29cmを計る。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ38

調査地区の中央部（５，５）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.7m，短軸0.9m，深さ21cmを計る。遺物は出土していない。

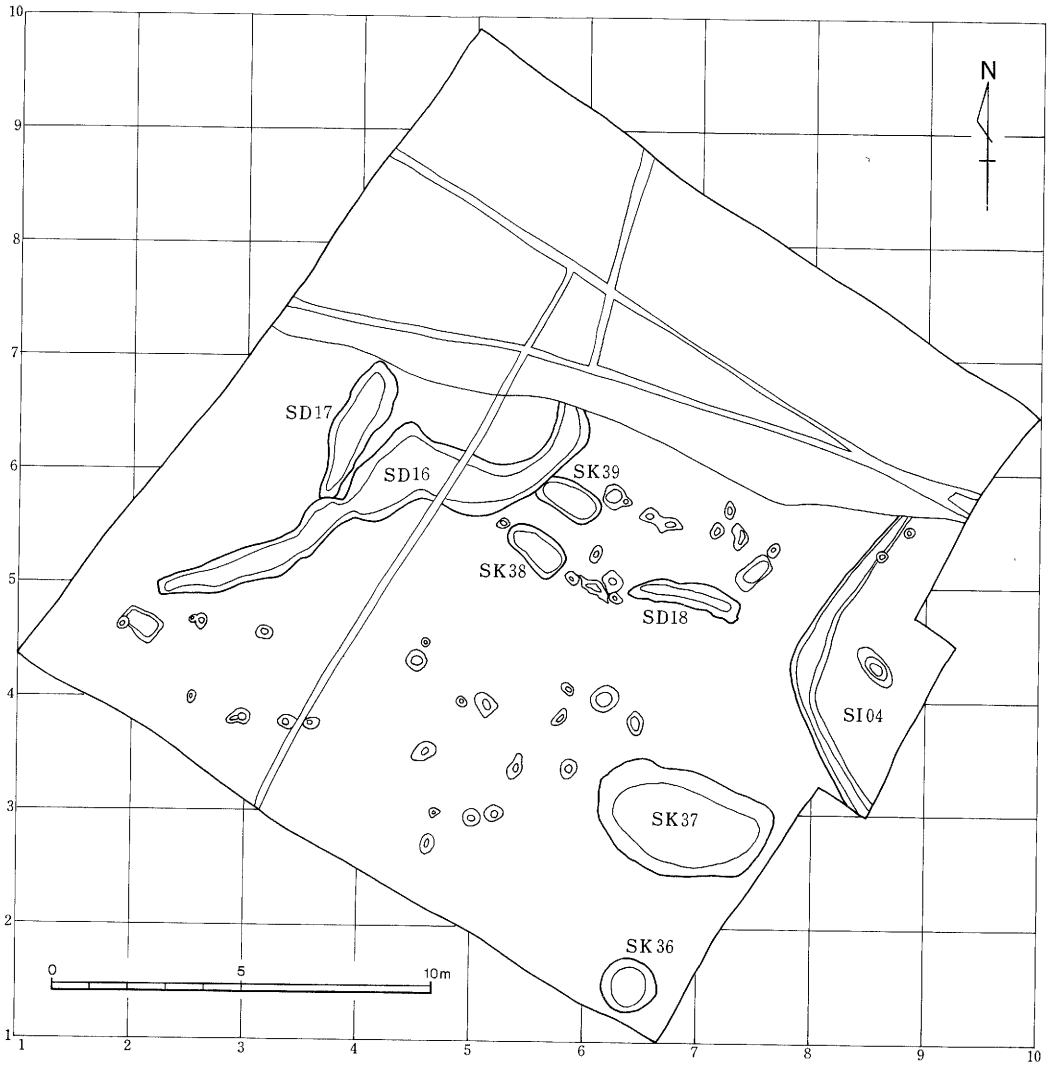
ＳＫ39

調査地区の中央部（５，５）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.7m，短軸0.9m，深さ15cmを計る。遺物は出土していない。

3．溝

ＳＤ16

調査地区の西側で検出された蛇行して走る溝。幅50～200cm，深さ４～13cmで，12mに亘り検出された。ＳＫ39とＳＤ17と接している。北側は攪乱に切られて終わっている。また，現代の暗渠に切られている。出土遺物は，土師器・珠洲，砥石である。



第３図　下佐野遺跡，横田地区遺構図（1/200）

ＳＤ17

調査地区の西側で検出された南北に走る溝。幅50～110cm，深さ４～６cmで，４ｍに亘り検出された。南側はＳＤ17と接している。出土遺物は，土師器・珠洲である。

ＳＤ18

調査地区の中央東寄りで検出された東西に走る溝。幅50～65cm，深さ22～26cmで，３ｍに亘り検出された。出土遺物は，土師器・珠洲である。

Ⅲ 遺　物

1．弥生土器

ＳＩ04出土の弥生土器

図面１－101～110，112～113，図面２－111である。

高杯；101～102。杯部外面に稜をなして外上方へ拡がる形態である。杯部はヘラ磨きし，赤彩されている。

鉢；103～104。104は外面にヘラ磨きが見られる。

壺；105～110。105は台付き壺である。口縁部と台部末端を欠如している。外面には丁寧なヘラ磨きが見られる。胴部中央に帯条の部分を設け，これに４条の凹線を入れている。106～110は複合口縁の壺の口縁部である。106～107は，内外面とも，ヘラ磨き赤彩されている。108は口縁部に７条の凹線が付く。凹線の間隔は不揃である。器壁が厚い壺である。109は，口縁部外面に鋭い稜をなして外上方へ拡がる。

甕；111～113。111は倒卵形の胴部に複合口縁の口縁部が付く。底部中央が僅かに欠損しており，全体の形態が判明しない。法量は，口径19.0cm，残存器高27.4cm，胴部最大径24.0cmである。口縁部は横ナデしている。内面には指圧痕が付く。外面は横ナデにより，凹線状となっている。胴部は，内面がヘラ削り，外面が刷毛目である。112は複合口縁の甕の口縁部である。
口縁部外面は，横ナデにより，凹線状となっている。113は甕の底部である。

その他の弥生土器

図面２－114～128。出土位置は，116と127がＳＫ37からである。その他のものは表土からの出土である。

高杯；114。高杯の杯部である。内面が刷毛目，外面がヘラ磨きである。内外面とも，赤彩されている。

蓋；115～117。115は３分の１程の残存だが，全体の形態が判明している。つまみ部以外は刷毛目による調整である。116はつまみ部のみである。117はつまみ部が欠損している。内外面をヘラ磨きし，赤彩している。

壺；118～123。118は小型の壺の口縁・肩部である。内外面ともヘラ磨きし，赤彩している。119は小型の壺の頸・胴上半部である。外面はヘラ磨きし，赤彩している。内面の頸部には，ヘラ磨きと赤彩が確認でき，口縁部から頸部にかけての状態を推定させている。120は小型の壺の底部である。外面は赤彩されている。胴部は119のようなものと想定される。121～123は中型以上の壺の底部である。

甕；124～128。124～125は複合口縁の甕の口縁部である。口縁部外面は，124が凹線状の横ナ

デ，125が４条の凹線文となる。126は複合口縁の甕の口縁・胴上部である。口縁部は横ナデ，胴上部は，内面が刷毛状具・ナデ，外面が刷毛目である。127～128は甕の底部である。

２．奈良時代～中世の土器類

土師器

図面３－129～130。出土位置は，129が表土から，130がＳＤ16からである。

椀；129。平安時代の椀の底部。底部は糸切りである。

皿；130。中世の皿。ほぼ完形である。法量は，口径6.4cm,器高1.8cm，底径3.6cmである。底部外面はナデであ。

須恵器

図面３－131～140。表土からの出土である。

杯；131～135。全体の形態が判明するものはない。口縁・体部片の131と体部・底部片の132～135である。132は高台の付かない杯で，底部はヘラ切りである。133～135は高台付の杯である。

杯蓋；136～139。杯と同様，全体の形態の判明するものはない。口縁部片の136とつまみ・天井部片の137～139である。つまみ部は宝珠形の137，偏平な宝珠形の138，偏平で中窪みの139と形態が種々ある。

壺蓋；140。壺・瓶類の蓋とした140である。

珠洲

図面３－141～144。出土位置は，143がＳＤ16からである。その他は表土からの出土である。

鉢；141。鉢の底部である。底部は静止糸切りである。

甕；142～144。甕の口縁・胴上部片の142～143と甕の底部片の144である。

青磁

図面３－145。攪乱からの出土である。

椀；145。輸入青磁椀の底部片である。

３．石 製 品

砥石

図面４－201～203。出土位置は，201～202がＳＤ16である。203は攪乱からの出土である。

Ⅳ 結　　語

下佐野遺跡の当「横田地区」は，この遺跡の北東部に位置する。南東側には，１区画の宅地部分を挟んで「井波地区」が所在する。井波地区は，平成３年度に発掘調査を実施し，弥生時代後期の竪穴住居址を３軒検出している。

今回の調査で１軒検出した竪穴住居址（ＳＩ04）は，調査地区の南東端部，すなわち井波地区側に位置している。住居址の全体を検出したわけではないが，その内容より，井波地区検出の竪穴住居址（ＳＩ01～03）と同様の形態で同時期のものと判断される。井波地区付近に中心があった住居址群の南西側のへ拡がりと考えたい。

竪穴住居址からの出土土器は，一応弥生土器としたが，弥生時代から古墳時代への移行期の土器である。ＳＩ01～03出土土器と同様，月影式～白江式の段階と平行するものとしておく。

土坑については，時期がはっきりしないものもあるが，ＳＫ36・37は弥生時代後期のものであろう。

３条検出された溝（ＳＤ16～18）は，珠洲等が出土しており，中世のものと判断される。

調査地区には，現代の新旧の暗渠が走っている。敷地（道路）と平行するものが新しく，そうでないものが旧い。また，調査地区の北側約３分の１については，試行錯誤をしつつ発掘調査を続けたが，近代の粘土採集の址との結論に達した。このため，すべてを掘り上げることはしなかった。

参考文献

上野　章　1967　「高岡市下佐野遺跡」『大境』第３号　富山考古学会

山口辰一　1992　『市内遺跡調査概報Ⅰ－平成３年度，石塚遺跡，下佐野遺跡の調査－』　高岡市教育委員会

2．間尽遺跡，高木地区

目　　次

Ⅰ　序　　説……13

Ⅱ　遺　　構……16

溝……16

Ⅲ　遺　　物……17

Ⅳ　結　　語……18

挿　図　目　次

第４図　間尽遺跡位置図（1/5万）……13

第５図　間尽遺跡付近遺跡地図（1/1万5千）……14

第６図　間尽遺跡，高木地区位置図（1/5,000）……15

第７図　間尽遺跡，高木地区遺構図（1/200）……16

第８図　間尽遺跡，高木地区出土土器実測図（1/3）……17

Ⅰ 序　説

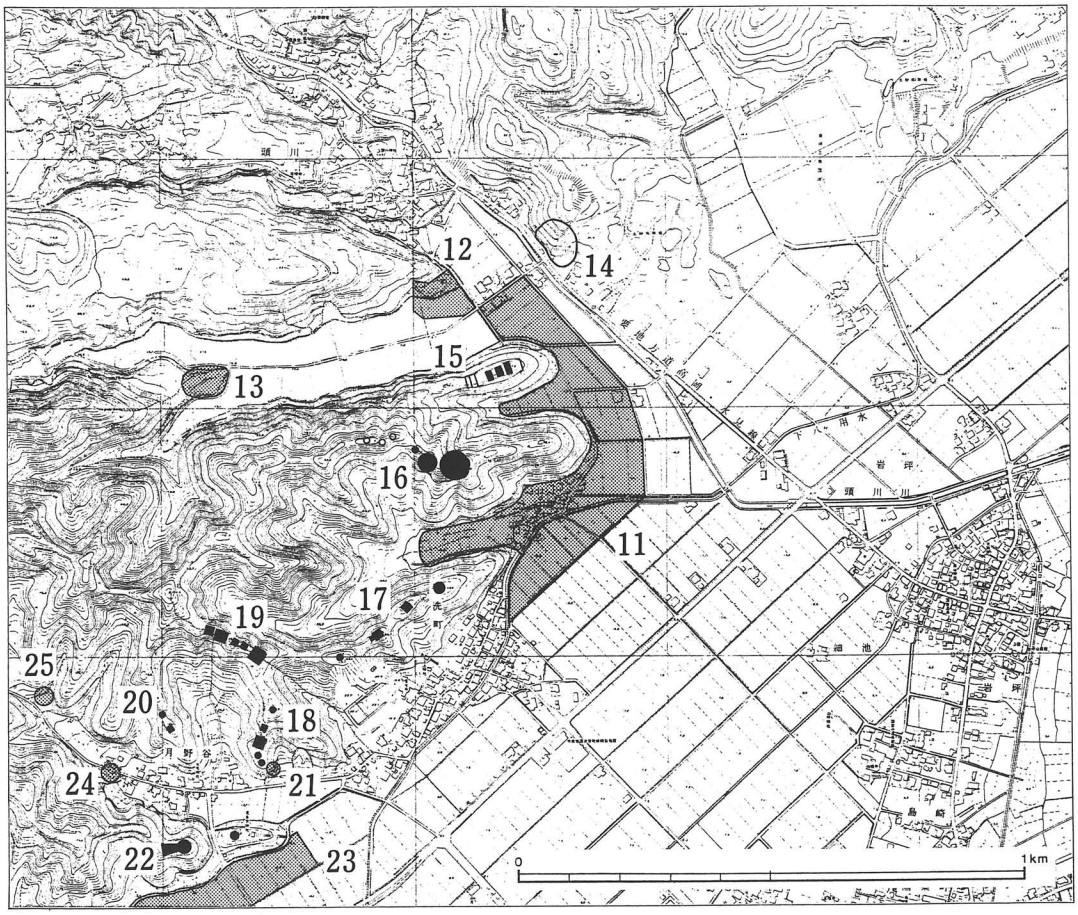
遺跡概観

高岡市北西部の丘陵は「西山丘陵」と通称されている。宝達山を中心に富山・石川両県下へ派生する宝達山丘陵東側の一角に当たる。新第３紀層を主体とする丘陵で，東西に走る尾根筋が氷見市との境をなしている。南東山麓には，いくつかの浸食谷が入っている。当「間尽遺跡」は，この浸食谷の一つである頭川谷の入口部に立地している。頭川谷は頭川川が形成した谷で，この川の南西側から丘陵地にかけてが間尽遺跡である。

第４図　間尽遺跡位置図（1/5万）

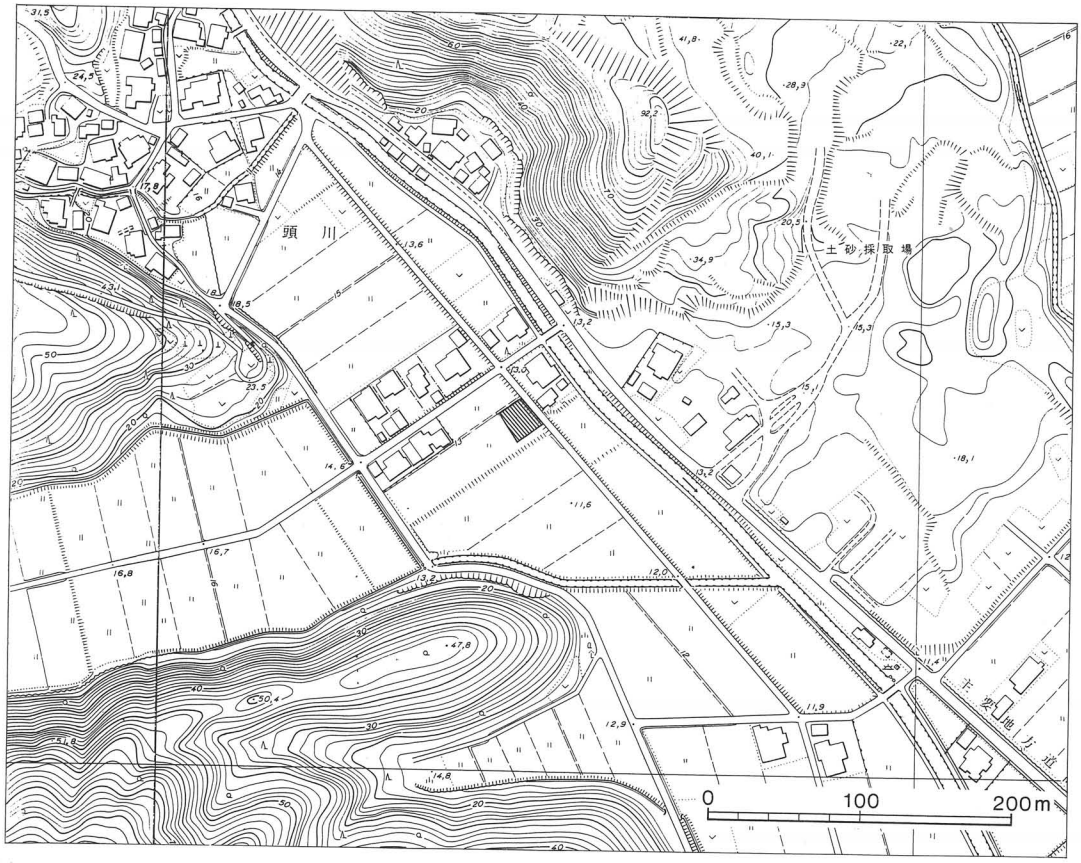
間尽遺跡は，南側の手洗野地区から北側の頭川地区にかけて拡がっている。東側は頭川川近くまで，西側は手洗野地区背後の丘陵までである。範囲は，南北約700ｍ，東西約450ｍを計る。

当遺跡の南側や西側の丘陵尾根上には，安居山古墳群，四十九古墳群，倉谷古墳群，道ケ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群，立山古墳群等の古墳が位置している。四十九古墳群は大型の円墳２基を基幹とするものである。倉谷古墳群には前方後方墳と思えるものもある。立山古墳群の１号墳は，大型の前方後円墳との指摘もなされている。頭川川を挟んだ対面の丘陵山腹には，頭川城ケ平横穴墓群が所在する。横穴墓は20基確認されている。一般包蔵地では，当遺跡の北西側は，滝ケ谷内Ⅰ遺跡である。また，当遺跡の東側一帯は，東大寺領「須加野荘」の比定地である。



第５図　間尽遺跡付近遺跡地図（1/1万5千）

11．間尽遺跡，12．滝ケ谷内Ⅰ遺跡，13．滝ケ谷内Ⅱ遺跡，14．頭川城ケ平横穴墓群，15．安居山古墳群，16．四十九古墳群，17．倉谷古墳群，18．道ケ谷内Ⅰ古墳群，19．道ケ谷内Ⅱ古墳群，20．道ケ谷内Ⅲ古墳群，21．道ケ谷内遺跡，22．立山古墳群，23．宮田遺跡，24．月野谷大谷内遺跡，25月野谷千草遺跡



第６図　間尽遺跡，高木地区位置図（1/5,000）

調査に至る経緯

平成４年３月末，市農業委員会からの照会で，当該地における農地転用と個人住宅の建設計画を知った。地主で施主の高木金治の承諾を得て，４月14日に試掘調査を実施した。この結果，溝等の遺構が検出され，土師器・須恵器等の遺物が出土した。本調査の必要がある内容であった。この結果を持って高木氏と協議し，本調査実施に至った。

調査の経過

発掘調査は，平成４年５月27日から６月９日まで実施した。実働調査日数は10日である。先ずバックフォーにより表土を除去した後，人力による掘り下げを行った。敷地，すなわち調査対象面積451m²に対して，201m²の発掘調査を実施した。発掘部分は建物建設予定地部分を中心としたものである。

検出遺構と出土遺物

検出遺構は，溝１条（ＳＤ01）である。

出土遺物は，土師器，須恵器，珠洲である。

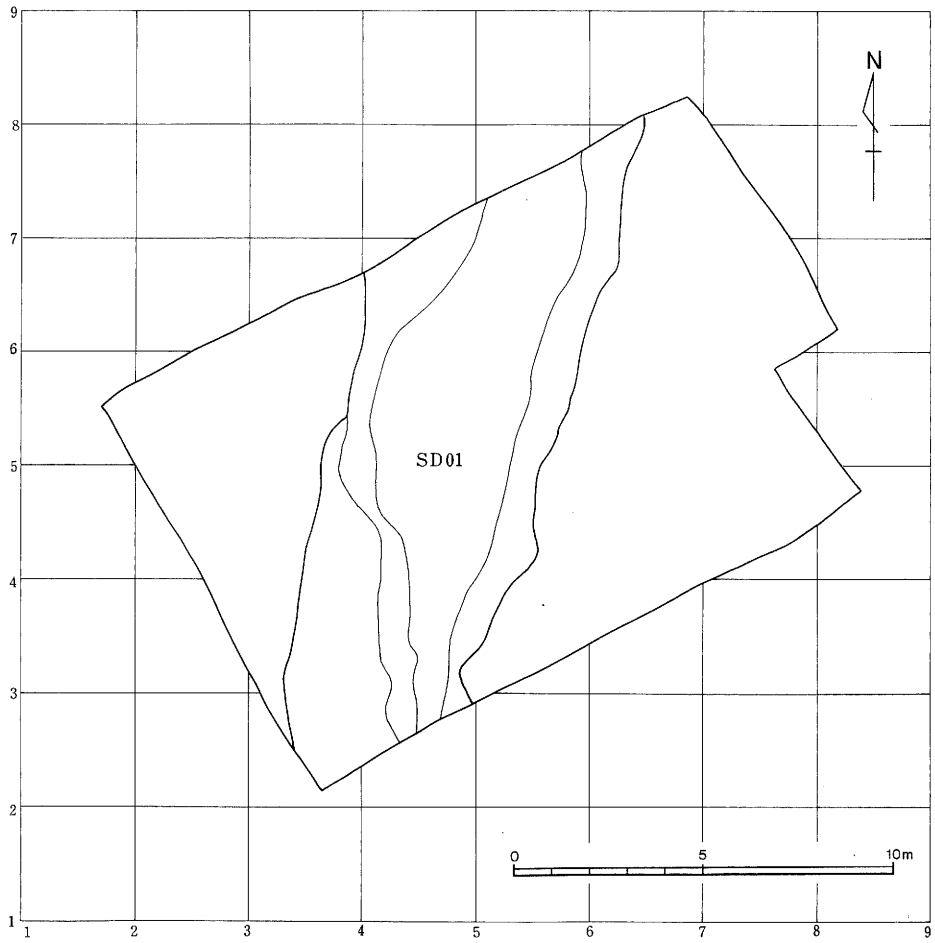
Ⅱ 遺　構

溝

ＳＤ01

調査地区の中央部で検出された溝。幅4.50～6.70ｍ，深さ20cmで，15ｍに亘り検出された。明褐色で粘土質の基盤層のなかに，黒褐色土の落ち込みとして確認された。覆土も粘土質である。幅に対して，浅い溝であり，自然の流路か凹地である可能性もある。

出土遺物は土師器である。



第７図　間尽遺跡，高木地区遺構図（1/200）

Ⅲ 遺　物

出土遺物は，土師器，須恵器，珠洲である。図示できるものは，第８図で示した。いずれも小破片である。

301．土師器壺，小型壺の口縁・胴上部，口径10.8cmを計る，ＳＤ01出土。

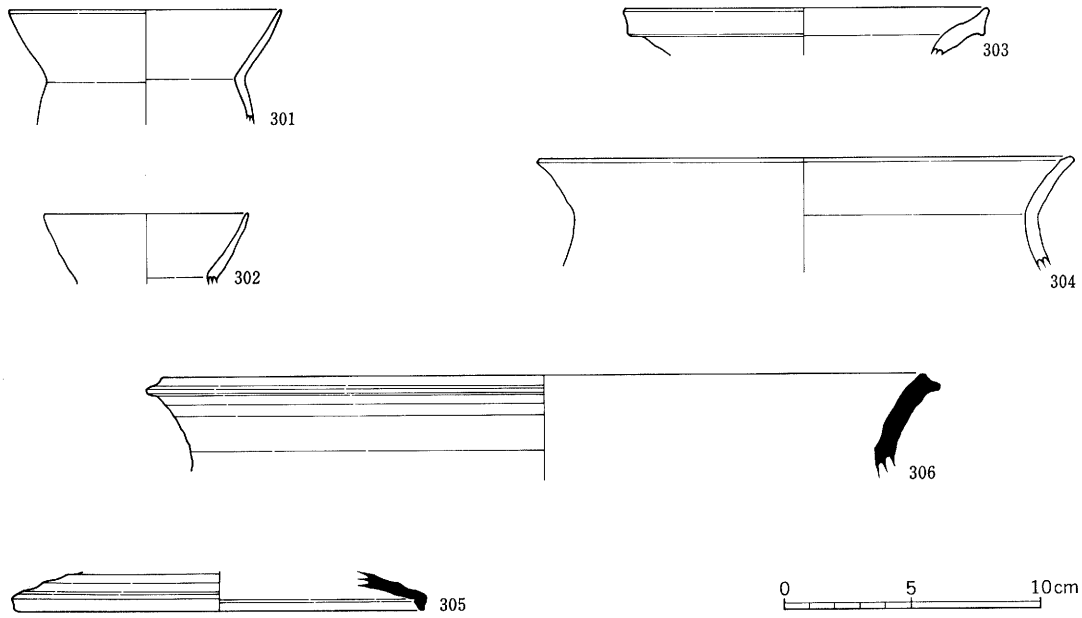
302．土師器壺，小型壺の口縁部，口径8.0cmを計る，ＳＤ01出土。

303．土師器甕，小型の甕の口縁部，口縁部は外面に稜をなして，外上方へ短く拡がる。口径14.2cmを計る。表土出土。

304．土師器甕，「く」の字口縁の甕，口径11.0cmを計る，ＳＤ01出土。

305．須恵器蓋，杯蓋の口縁部。口縁部は下方へ短く折れる。口径15.9cmを計る。表土出土。

306．須恵器甕，甕の口縁部，口径30.0cmを計る。表土出土。



第８図　間尽遺跡，高木地区出土土器実測図（1/3）

土師器；301～304，須恵器；305～306

Ⅳ 結　語

当遺跡は，「頭川遺跡」「頭川間尽遺跡」「間尽遺跡」と称されてきた。分布調査や過去の工事中の出土遺物等から判断した遺跡の範囲は，旧地名の大字手洗野小字間尽と大字頭川小字間尽を中心に拡がっているので，「間尽遺跡」と称しておく。

昭和45年～昭和47年に当遺跡一帯で，圃場整備事業が実施され，多くの遺物が出土した。このことが，当地に遺跡が所在することを一般に明確に認識されることになった。

昭和49年に，上野章氏により，この遺跡の調査内容や，出土遺物の報告がなされ，当遺跡の重要性が知られることになった。この報告で，とりわけ注目を集めた点は，東北系の弥生土器である「天王山式土器」が多量に出土しており，さらに，畿内系の弥生土器である「櫛描文系土器」が伴出することであった。

昭和59年には，高岡市教育委員会により，当遺跡を含むところの国吉地区において，遺跡分布調査が実施され，遺跡の確認や再確認がなされ，遺跡の範囲や内容が総括的に提示された。

昭和62年に至り，西井龍儀氏により，北陸地方の古代寺院や古瓦の研究報告において，当遺跡出土の古瓦の紹介と歴史的位置付けがなされた。この古瓦は７世紀末頃の丸瓦で，近くに瓦の供給先や生産地の存在の可能性が指摘された。

その後，当遺跡において，小規模な試掘調査を実施した。遺物の出土をみたが，圃場整備事業による掘削や，沼地部分であったりして，遺構の検出には至らなかった。

今回の発掘調査では，自然の流路とも思える溝が１条検出されたに止まる。出土遺物も多くなく，遺跡範囲の北端部と考えられる。

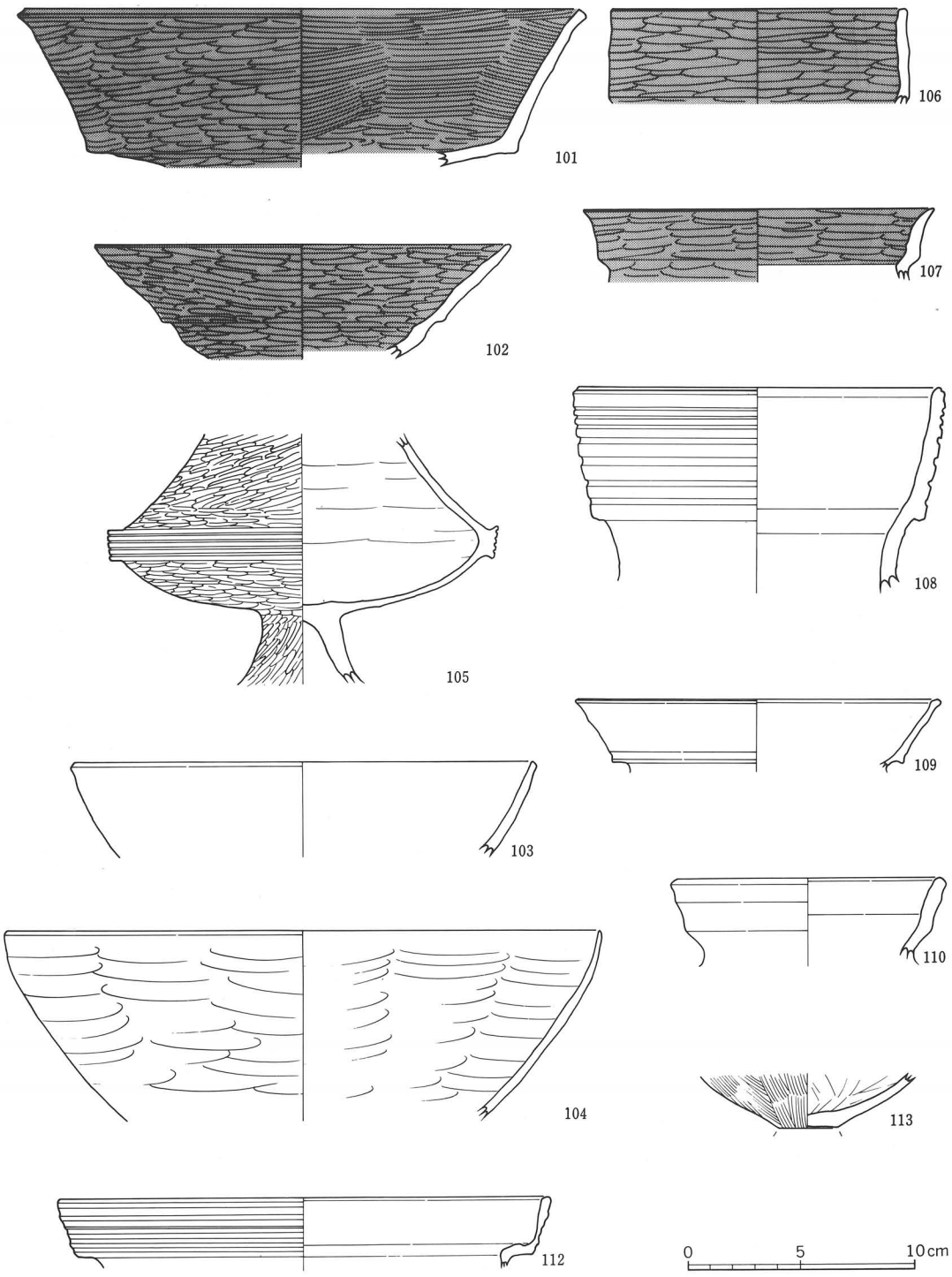
参考文献

上野　　章　1974　「頭川遺跡」『大境』第５号　富山考古学会

大野文郷他　1985　『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅱ　高岡市教育委員会

西井　龍儀　1987　「頭川間尽遺跡・寺家廃寺」『北陸の古代寺院』　桂書房

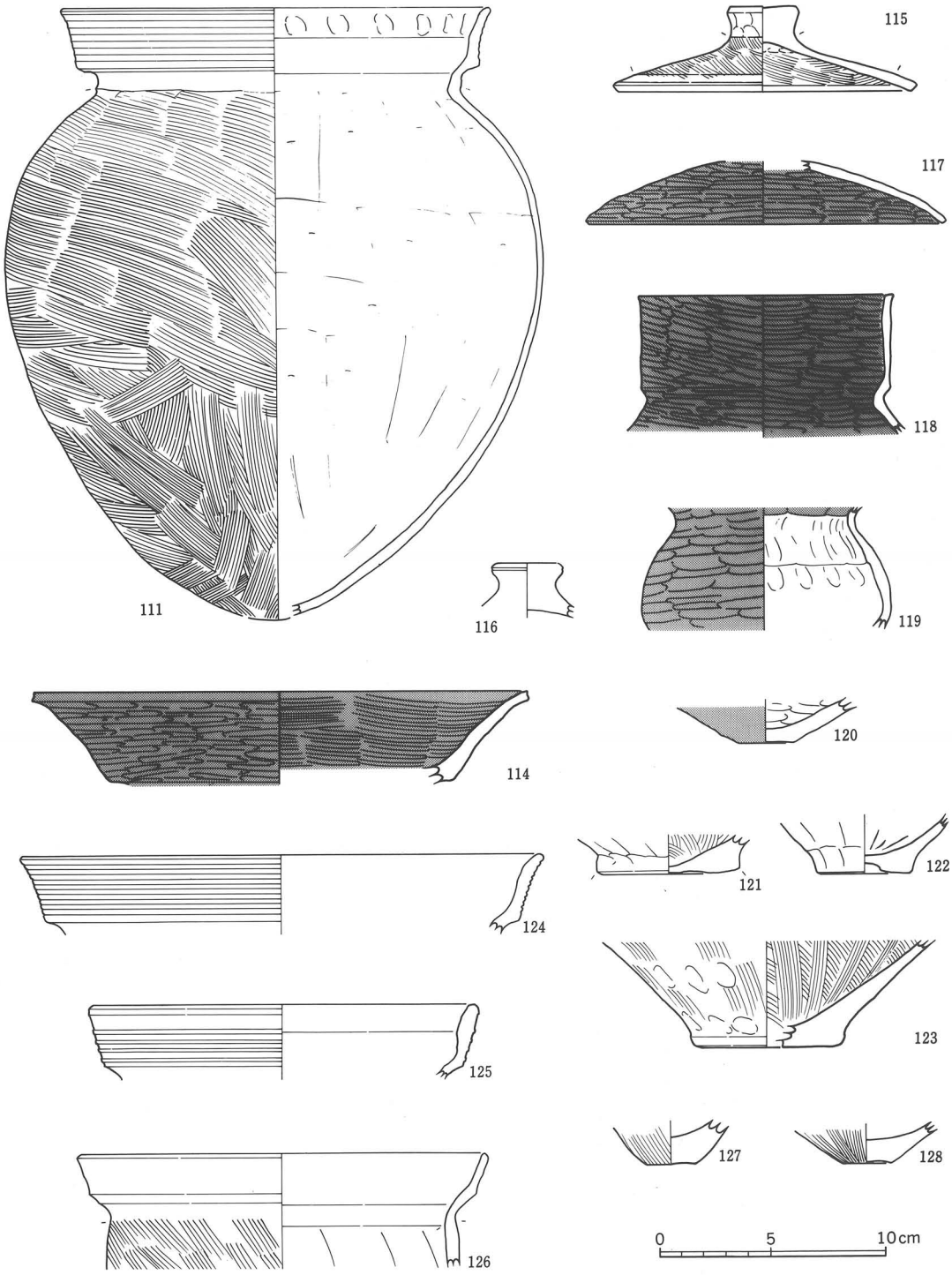
図　　面



弥生土器

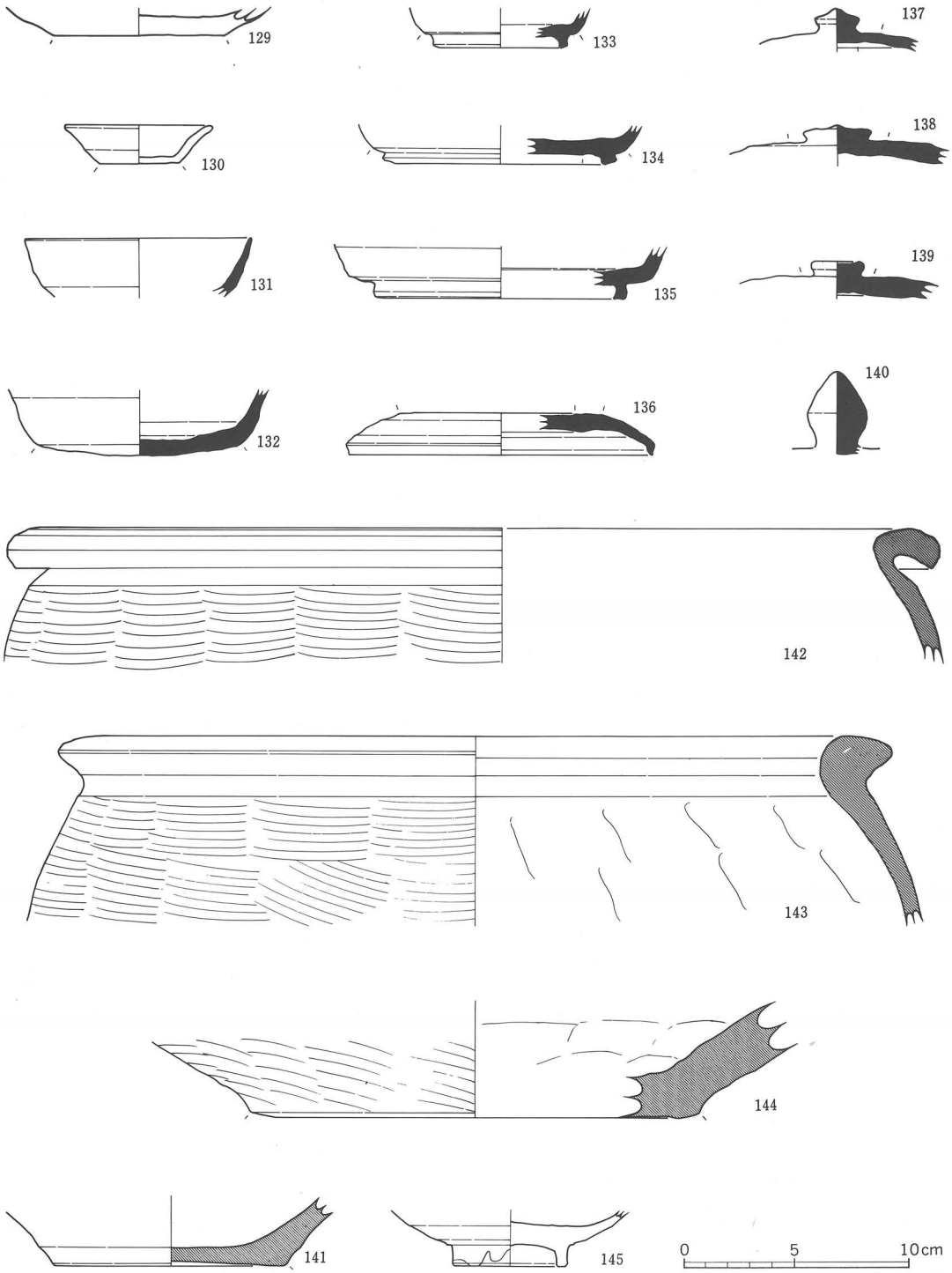
縮尺1/3

図面2　遺物実測図　下佐野遺跡　横田地区



弥生土器

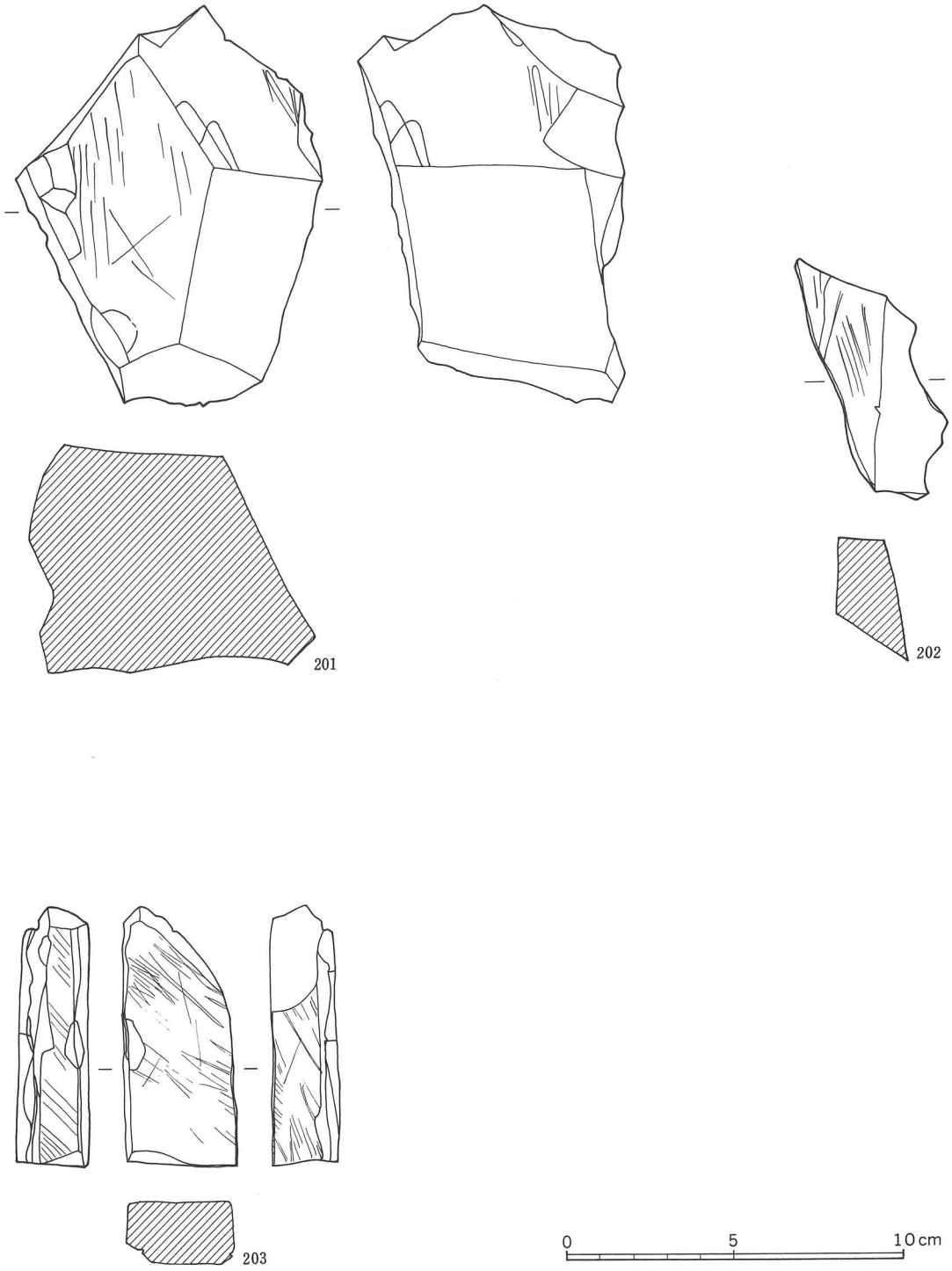
縮尺1/3



奈良時代～中世の土器類,　　縮尺1/3

土師器；129～130，須恵器；131～140，珠洲；141～144，青磁；145

図面4 遺物実測図　下佐野遺跡　横田地区



石製品，砥石

縮尺1/2

図　　版

図版1　遺構　下佐野遺跡　横田地区

1．調査地区全景（南西）

2．調査地区全景（南東）

図版2　遺構　下佐野遺跡　横田地区

1．竪穴住居址ＳＩ04全景（西）

2．竪穴住居址ＳＩ04全景（東）

1．調査地区全景（北東）

2．調査地区全景（南）

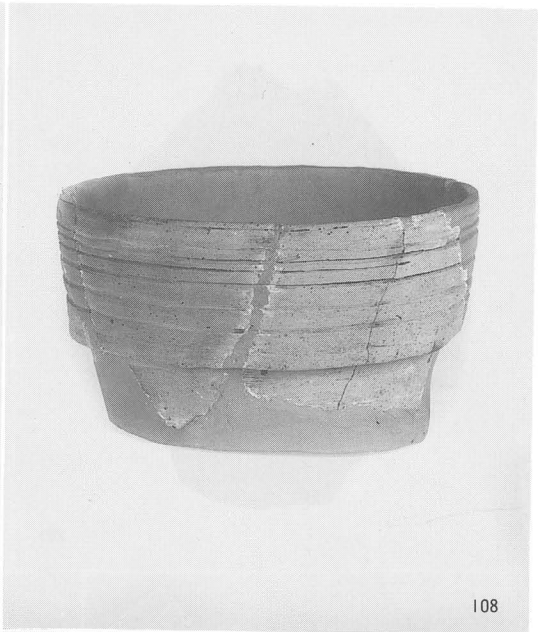
図版4　遺構　間尽遺跡　高木地区

1．溝ＳＤ01全景（北）

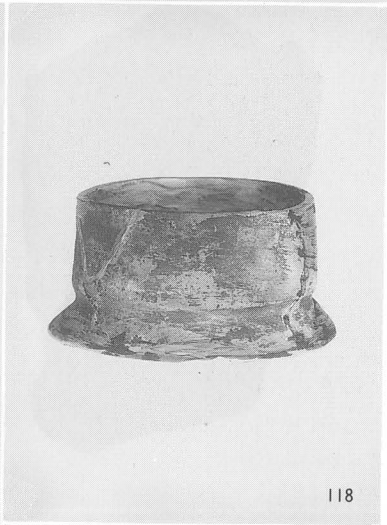
2．溝ＳＤ01全景（南）

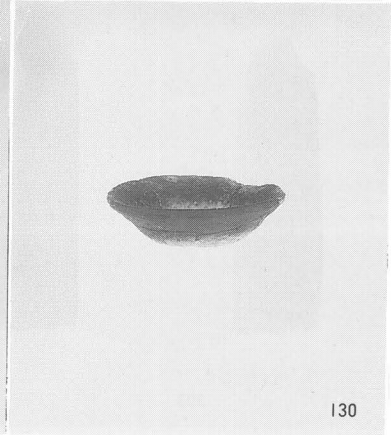
図版5　遺物　下佐野遺跡　横田地区

105

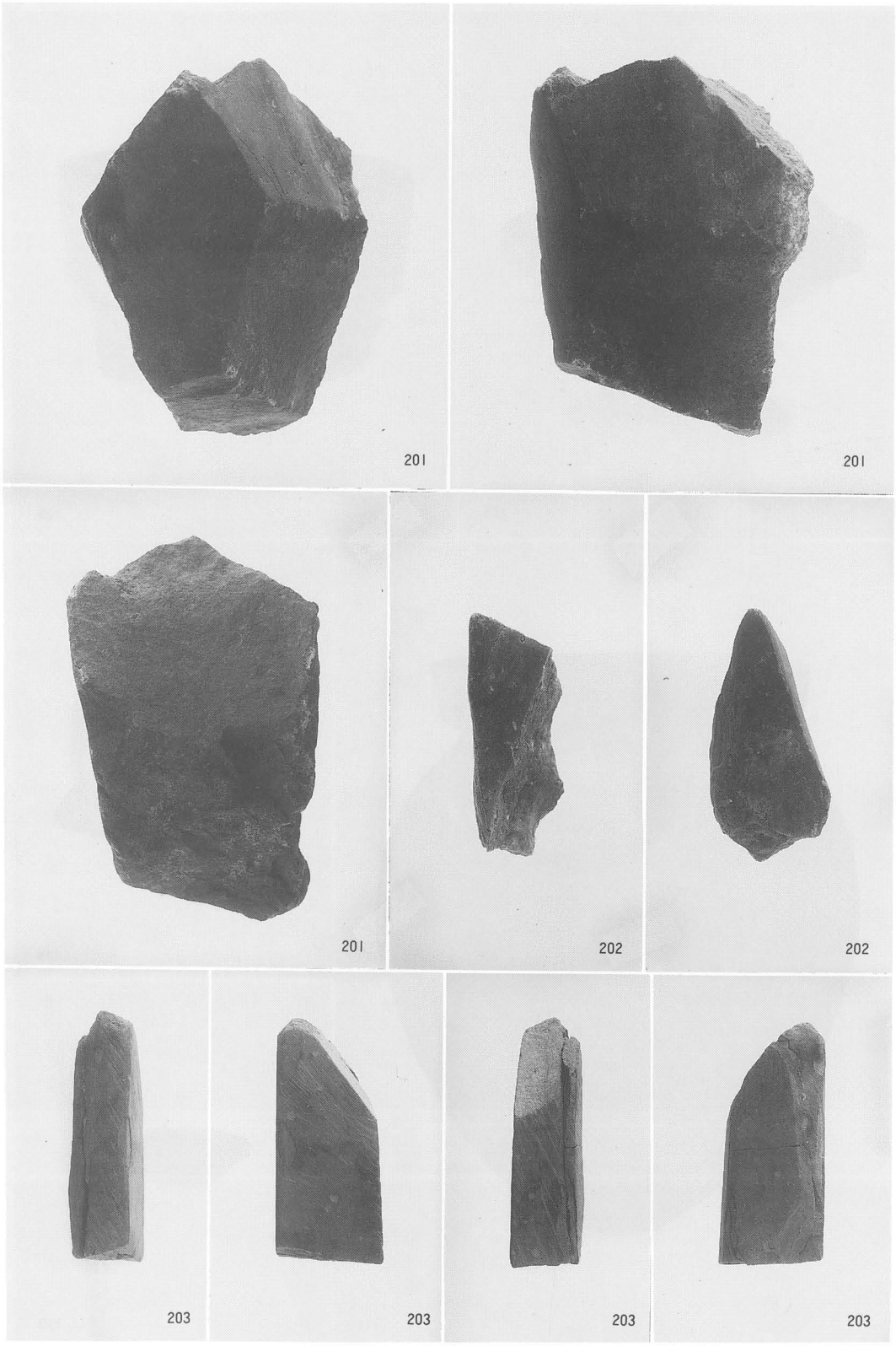

108

111


118


130

弥生土器・土師器



石製品

高岡市埋蔵文化財調査概報第20冊

市内遺跡調査概報Ⅱ

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路７－50

1993年３月31日

印刷所　小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町３